

熊谷子育て Dot to Dot 2018



少子高齢の日本社会。どのまちも子育て支援アピールに積極的だし、幼児教育はじめ子どもビジネスもさかんだ。わがまち熊谷はどうだろう。「子どもとその親」が暮らしやすいまちをめざした、いまはまだそれぞれが「ドット(点)」であるさまざまな試みをみていく。

過去の「熊ふえす」の様子。オシャレ度の高い子育てイベントは全国的に増えている



くまつしえ代表 大谷光代さん (第3までしこ保育園・すずかけ)

10年目の脱「くまSNS」をめざす!? 支援拠点連絡会「くまつしえ」

今回取り上げた中でもっとも歴史の長いのが、子育て支援拠点連絡会「くまつしえ」(表紙)。今年で10周年を迎えた。「子育て支援拠点(センター)」は、おもに小学校前の親子をサポートする。保育園・託児所、公民館・保健センターのような公共施設、大学やNPOと運営主体はさまざまだが、いずれも「子育てのブ」によるサポート。保育園と違って親子で行き、あそび方や読み聞かせ、親子同士の交流、子育て相談など多彩なメニューを提供している。イオン熊谷内でNPO子育てネットくまがやが運営する「0・1・2・3さいくまつべ広場」をのぞいてみたことのある方は多いだろう。くまつしえは現在19か所ある市内支援拠点のネットワーク。

熊谷の「くま」と「支援」の「しえ」で、合言葉は「ここが、あるよ。ここに、いるよ」。こうした連絡会に市が入っているのはめずらしいという。100人以上集客がある合同イベントが「くまSUNフェスタ」。第9回も昨年11月、くまがやドームで開催された。代表の大谷光代さん(第三までしこ保育園)はこう語る。「そろそろ「くまSUNフェスタ」の団体からは脱却したいですね。フェスタはわたしたちを知っていたんだための企画。それよりお母さんたちに対して、共通の「想い」を持っていける集まりにしたいです」

「くまっころーむ」とガイドブック「熊谷で育てる」

続いて行政サイドの取組。昨年10月、市役所6階に子育て世代包括支援センター「くまっころーむ」、母子健康センター内に「くまっころーむ母子健」が開設された。同センターは妊娠前から18歳までワンストップでサポート。「ニッポン」徳総活躍」に基づいて、平成32年度までの全国展開がめざされている。同時に子育て支援ガイドブック

「熊谷で育てる」を作成。子育て世代4組のインタビュアーはじめ、父親の子育て・祖父母世代の孫育てなどレンジの広い情報を発信した。

住宅展示場で支援イベント!? ママたちのグループが続々

企業や他地域団体とのコラボにも積極的な、ママたちも現れている。

「熊谷ハウジングステージ」(石原)などで「親子3世代で楽しむ地域のファミリーイベント&ママの働き方見本市 熊ふえす」を主催しているのが「EnglEveMon」。県内全域でママの居場所作りやプチ企業支援などを行う上尾市本部の同団体県北支部として、市内や周辺のママたちが活動している。

今月も5日(土)に「熊ふえす2018春」を開催。自らもアイシングクッキーのブランドをプチ起業した支部代表の幸田紗矢香さんはこう語る。「女性が趣味や特技を活かして自立し、地域で子育てを楽しみながら活躍して輝ける地域社会を確立できるサポートをしたいです。親子三世代で楽しさを共有できるイベントで、地

域に愛着を持つ子どもが増えていると願っています」5日は荒川公園で、「ばわふるママ」の毎年恒例育児支援バザーも開催。子育てイベントはしごも可能になった。上映会やパフォーマンスで考える、障がい児が暮らしやすいまち

難病の子どもたちへ「生パフォーマンス」を届けるNPO「心魂プロジェクト」とコラボした「大感謝祭」と積極的に展開。今年度から市民活動支援センターにオフィスを構え、活動をより広げる方針だ。代表のごずともこさんはこう語る。

「にじいろリンクプロジェクト」は、障害の有無に関わらず幼少期から子どもたちがふれあえる機会を創りたいとの思いから生まれています。子どもたちが住み慣れた熊谷で、心穏やかに暮らせる環境をつくるのがわたしたちの願い。小さいことから始めています」

このほか昨年6月オープンが発達に障がいを持つ未就学児を支援する「シユシユ熊谷」(原島)など、市内や周辺にさまざまな障害を持つ子どもの支援施設も増えている。

パパたちの「ゆる」「ミユ」はビジネス展開大歓迎!?

パパたちにも新たな動きが出てきた。とくにPTA以前、未就学児のイクメン情報を共有しようとの春起ち上がったのが「パバビーン」。

パバビーンけんはく。SNSをメインの活動の場、埼玉県北をエリアにし、企業と組んでのビジネス活用も大歓迎という。リアルイベント第一弾は「パバフェスタ」。母の日に荒川公園に子どもと集まって、ママたちに好きなことをさせようというユニークな企画だ。発案者で同イベント事務局のインフォシズ(株)代表、熊谷市議でもあるかげやまたくやさんはこういう。

「最初の子どもももうすぐ2歳。ボクの顔みて泣いてた赤ちゃんの時から、ずっと考えてた企画です。パバ同士のネットワークができればいいですね」

「自然のあるまち」の「子育てをSNSでアピール」賞品も!?

まちづくりの既存団体からの提案もある。「自然の中での育児」を意味する「ネチャ育」をスタートしたのは(公社)熊谷青年会議所(JC)まちづくり実践委員会。You Tube、Instagram、Facebookでの「ネチャ育」投稿を募り、「子育てしやすい自然のあるまち」熊谷を発信する。現在、Instagramの「#ネチャ育」投稿で毎月5人に

クオカード1000円分を抽選でプレゼント。同委員会大澤重明委員長は、「まず、「ネチャ育ページ」で検索してください。You Tube「ネチャ育動画」も観てくださいね!」とアピールする。

「関係なく」はいいないための「Dot to Dot」

2018年の熊谷で展開する子育てに関するあれこれをざっとみてきた。「くまつしえ」代表大谷さんは、スタートの10年前と比較してこう言う。

「情報化は進んでいるけどコミュニケーションは崩れてるから、お母さんたち同士は以前よりつながりた、子育ての悩みを肌でわかってもらいたいという思いが強くなっている気がします。スマホのようなツールはできたけど自分からつながる勇気がないから、そのきっかけをつくることわがわたしたちの仕事はだったりするんですね」

例えば「つながりたい」のは、これだけさかんな熊谷の子育てプロジェクト間も同じではないだろうか。一つひとつは「点」で



2001年より発行している、現役ママの最新子育て情報誌「ホップステップジャンプ」もお忘れなく。



チラシはネット上で公開し、予想を上回る反応だという